

潮

論

教育ノート 教育現場の中で……

北川鬼太郎

江口幹『メモ・日本の政治的状况』

編集部

『性とアナキズム』と、雨夜の星と

中村隆司

世界語・エスベラントについて

江藤敏和

教育ノート

教育現場の中で……

北川鬼太郎

る存在なのだといふ時、教師とは「苦悩」とシノニムである。

中学校の教員になると言う全く思いがけない職場に身を置いた私は、一教師として生徒に對峙した時、今まで觀念に描いた教育の理論が、いかに現実の教育現場で実践困難なものであるか思い知らされた。

具体的に四十数名と言ふ生徒と連日、四十五分の授業を行うのであるが、生徒一人一人の学習能力の差は全くかけ離れている場合があるのだ。低い方の生徒は通常、お客様と呼ばれ、一クラスに二・三人の彼らは常に静かにして皆に邪魔をすべきでないと言ふ強制、管理下に置かれる、四十五分の沈黙はよほどつらいらしく、つい隣近所にちよっかいをだす。そこが震源地とでもなればクラスの雰囲気は勉強に集中どころではなくなる。

教科によっては抽象的な思考を要するものがあるので本当の所、かわいそうな位である。もっと能力に合った、その子一人一人の主体を生かす非画一的な授業を生みだせないだろうかといつも思うのである。

だからと言って、もし本当に能力別学級でも実施すれば現在の選別体制に手を貸す

教育の荒廃が叫ばれているが、どのよう
な内実をもととして「荒廃」が語られるの
か、「荒廃」とは具体的にみえて、実は象
徴的でもある。

教育現場で働いている多くの教師達は、
自分の存在のありようを真に問う作業を経
ずして「教育問題」について切開する事は
できないであろう。

そして教師のだけれども自分自身のありよ
うを真に問いつめていけば、国家権力の補
完物としての機能を現実果たしているの
だと気付かざるをえない。生徒に対しての
、真実を隠蔽する抑圧者でもあり、かつ一個
の人間として国家権力によって支配される
被抑圧者でもある。教師とは加害者であり、
かつ被害者でもある双神の面をかぶってい

事は考えるまでもない事実である。これを超えるためには社会体制そのものの変革を抜きにして——学力、学歴等による差別のない社会構造でないかぎり——不可能なことだし、それにしても八生徒√一人一人の主体を生かした教育とは本当に可能なのであろうか、私達は、それを単なる言葉のレトリックに終わらせてはならないのだとすれば現実↓理論の肉迫した状態を創造しなければならぬ。自分自身で満足できる教育実践の道はあまりにもけわしい。

そしてその教育実践を管理強化しようとする支配体制の力はますます増大してゆく、その国家権力に対して、一個の教師が加害者である事を止めようと自覚するかぎり国家権力との戦いの終りはないのだとすれば、教師√教育労働者の戦いの地平はどのようにして切り開かれてゆくのであるか。

二 政府√自民党は教育支配に対する執念を着実に押し進めている。「人確法」の成立後、アメ（人確法による給与引き上げ）とムチ（ストに対する刑事弾圧）の政策を強行している。

四・一一ストに対する刑事弾圧は政府√官憲の一体となった露骨な教組破壊攻撃であって一時的な参議員選挙対策だと考えるのは誤りである。国家権力は教頭法案を可決後（九月の新学期より全国の学校で法的根拠をもった管理職となる）着実に更なる帝国主義的教育再編——中教審路線——を貫徹してくるであらう事は火を見るより明らかである。

これに対して教師の戦う姿勢はどうか、当然反動化した教育政策に対して充分意識化した闘争を担う教育戦線を強化しなければならぬが、実際、教師の多くは、全くのハモノトリ主義√に墮してはいないか？日教組のモノトリ主義的体質を本質的に解体止揚した運動を創造的に表出させなければならぬ。

村田栄一氏は 日教組指導部は、モノトリ主義によって結集した人間がそのシッベ返しにすぎぬ「優遇」と「弾圧」の二重の鞭に追われて後退したあと、最後まで残って、その旗を守り続ける人間はだれかということを実剣に考えるべきであらう。

とのべるが全くの同感である。私はそのよるな悲劇的な後退を避ける戦いを今、展開しないかぎり、教育の反動化は更に強化される事は確実であると思う。

以上のような政府文部省√官憲の一体となった教育反動化攻勢の中で実力をもって強固に反撃していかなければならないのに、日教組、都教組執行部は四・一一ストに対する刑事弾圧に対して反弾圧、抗議のための四・一六の二時間ストを計画しながら、中止理由を全組合員大衆に明確化せず中止をしたと言ふ事実は何をものがたっているのか。

そして一カ月以上たってからやっと五・二三早朝一時間抗議ストと言ふ全く後退した茶番劇的と言いたくなるスト戦術をうったのである。このような体質では、政府の反動化した教育政策を粉砕する事は困難である。

それにもかかわらず、都教組執行委員会、日教組中央闘争委員会の第四五回定期大会運動方針案の「秋季、年末闘争を継続的に展開する中で、七五春闘を、本格的賃金闘争として成功させるために、春闘共闘に結集する全労働者」とより強固な連帯行動を

つみ重ね重要段階においては、強靱なストライキを配置してたたかいます」と言うストライキ戦術に対して都教組執行委員会は七四年六月に「日教組大会議案に対する私たちの見解」を発表しストライキ戦術に批判的な態度を明らかにした。

ストライキ闘争強化の方向は、教師の仕事の特殊性をみないばかりでなく、広はんな世論の中で、弧立化させられる危険性を知らんでいます。

父母、国民との団結が一層深まり、反動勢力に真に打撃を与え、弧立化させる中で要求も大きく前進するような教育労働者の力をあますところなく発揮できる戦術形態を創造的に発展させていくことがとくに重要になってきている。

参院選の中で、日教組攻撃がますます激化する重大な情勢の下で本議案で提起されているストライキ闘争戦術についてこれを私たちはそのまま肯定するわけにはいきません。

都教組日共系指導部は日教組のスト戦術に対して更なる刑事弾圧を恐れたか、あるいは父母のわが子かわいさ意識を恐れてか

(その父母、国民大衆に対しての積極的な

ストを含めた教育論議を回避して) 都教組指導部はスト戦術を保留にして、父母、国民との団結が強まるスト戦術以外の戦術形態を創造的に発展させようと言っているのである。日共系の指導部はよほど父母に対して遠慮しなければならぬ理由があるのか。保護しなればならない理由があるのか。保護を要員を置いたり(ストライキに参加しながら、一方で学校へ組合員を生徒の保護のために残す)して自分からストやぶりの片棒をかつぐことを主張したり、スト戦術以外の創造的な戦術形態をのみだすと主張したり、どうも日和見主義的な戦術しか思いつかない組合指導部に対して私々は弾固糾弾

江口 幹

『メモ・日本の政治的状况』

編集部

この一文は江口幹氏が五月に発表した仏文『Mémotre sur la situation politique Japonaise (1967-73)』のなかから、現在のアナキズム運動に関する部分を要約したものである。(編集部)

しななければならない。新たな労働組合運動を指導部↓組合員大衆と固定化した運動方針でなく、全ての分会の創造的運動を普遍化して行く、分會討議の生きたエネルギーを下からくみあげて行く任務が中央機関であって組合員大衆を管理指導するのが任務ではない。もっとも分會そのものが強固に自覚的自発的に運動を推進していくエネルギーを不断にもち続ける事は非常に困難な事であろう。しかし敵権力の野望を打ちくだくのは一部日教組、都教組官僚にあるのではなく、大衆組合員の戦う力の総体なのだから。日本のアナキズム運動は六〇年以上の歴史を有している。しかし、一九六八年まで日本アナキズム連盟は存在していたにもかかわらず、アナキズム思想というものは長い間忘れ去られていた。

現在のアナキズムは、ここ数年間にみられた大衆斗争のなかで再発見されたものであり、ノンセクト学生、自主的な市民運動のなかには多くの面でアナキズム思想の特徴がみられる。またジャーナリズムでもアナキズムに関する文献等が数多くとりあげられるようになり、「アナキズムの復活」といわれるようになった。学園斗争のなかで、各大学のアナキストのグループが結成され、彼らはノンセクト学生と共に闘った。東京ではCSLがノンセクト学生の間から生まれた。

大衆の斗争が後退していくなかで、アナキズム運動も後退を余儀なくされた。特にアナキズム運動は労働運動のなかに活動母体をもっていなかったため、学生運動の後退とともに徐々に消えていった。CSLが、そしていくつかのアナキストグループも消え去り、アナキズム関係の新聞・出版物等がなくなり、個人的な数少ないグループだけが残ったにすぎなかった。

とはいえ、アナキズム運動もそう悲劇的な材料ばかりではない。ここ数年の斗争のなかで、いくつかのアナキズムの芽が生まれ、大衆斗争のなかから反権威主義的な性

格をもったものがみられるようになってきた。アナキズムに関心をもつ若者は増えてきており、斗争のなかであらたに認識されたアナキズム思想は、徐々に再形成されつつある。また運動の面においても、各地に分散したアナキストのなかから連合への模索がみられる。

このような状況のなかで、いま一番大きな問題となっているのは、現在の大衆運動のなかにも多くの反権威主義的なのがみられるにもかかわらず、その期待に十分答えることのできないアナキズム思想の弱さである。

『性とアナキズム』と、雨夜の星と

中村 隆司

私がこの本を目にしたのは、かなり早い時期であったと思う。内容を読みとる暇はなかったのだが、その装幀と書名に、これは売れるだろうと思った。こういった感じを持ったのは、やはり売れないものをいくつ作ったところでどうしようもないと思っ

単に体制を批判すること、権威主義的な運動等を批判することだけで満足される時代は過ぎ去ってしまった。現行社会から出てきてどういふ変革を行なっていくのか、具体的な展望を示さなければならぬ時期にきている。

このような観点に立って江口氏は、大衆の自主的な活動、アナキストの小さなグループと連帯しながら、いま述べた課題に答える理論、現実との関わりを含めたアナキズム思想の作成にとり組む必要性を述べている。

た為である。別にジャーナリズムや大衆に迎合する必要はないが、我々の思念の全てを費やしても出さなければならぬと感じたものがあれば敢然と出すべきではあるが、売れないよりは売れた方がいいに決まっている。そして何よりも読まれた方がいいの

まい。

五、六年前にこうした奇立ちに身をさ
いなまされていた私達は、それぞれの思い
をこめて出ていった。ともかくやってみよ
うじゃないか。私達は、こうした焦慮を超
えるべく、裏づけのない言動を拒否し、時
には沈黙を選んだ。それはこんな風に言う
ことであった。「……は違っている。だか
ら私は、それに対して……のように行動す
る。」言いつばなしにしない。批判しつば

象した総体としての思想と理論の深みは、
抽象の方法、情況を見透す目の厳しき、深
さ、従って自己を対象化する厳しきに関わ
っている。人間の思いや行動を深いところ
で決する初原の闇のようなものであるとす
るなら、それは決して先天的なものではな
く、私達の生きていく時間や社会、生命と
はおうおうにして既成の道徳や社会のクロ
ーガンによるものであったりする。

なしにしない。必らず自らの対案と行動を
付随させる。そうでなければ、私達の実践
は何もないということと同じなのだ。私達
は、そんなふうな自らを措定し、やってき
た。だが、今気が重いと感ずるこの『性と
アナキズム』の内容は、そうしたレベルで
は未だ私達の思想を語りえていないとい
うことと無関係ではあるまい。

思想とはそうした初原の闇に位置するも
のである。それ故、アナキズムという思想
の対決・駆逐を、従って自己の価値感と
の徹底的な対決と自己を切り刻むような対
象化を、意識的に追求しなければならぬ。
そうした地点にまで自己を高める執拗な執
着は、反省された表現と言葉に凝集されて、
自己の一里塚となって現われねばならぬ。
それが、理論作業である。厳密に言えば、
こうした個々の人間に体现される理論が社
会的な普遍性を持ちうるのは、彼が一個の
人間としてのみ存在するのではなく、社会
的な存在として存在するからである。そし
て彼の実存としての特殊性と彼の連らなる

社会の諸現象及び本質性との豊かな往復。
交感の深さが、彼の理論の深さに呼応する
ものとなるのである。
こうした意味で、小川さんの評論集はそ
の視角のユニークさや夜空の星の如き輝き
を私に感じさせはするが、それは「キー
・ワード」ではあっても体系ではない。そ
れ故、私達の現状に対して、自己認識を新
たにさせるものではある。
そうした結果として、あらためて私自身
のアナキズムに関する理論作業を書いてお
けば、次のようである。

小川さんの論文集は、表紙に記されてい
るように評論集なのである。彼自身もこの
本の中で言っているように、『不滅であっ
て同時に挫折的な哲学体系を必要』とされ
ているのである。理論や思想の次元に、個
別のな情況を同次元のものとして対置して
みても始まらない。個々の情況を厳しく抽
出した総体としての思想と理論の深みは、
社会的な諸現象及び本質性との豊かな往復。
交感の深さが、彼の理論の深さに呼応する
ものとなるのである。

第一に、戦後史の中でのアナキズムの実
践と理論を整理し、現状認識のステップと
すること。これは、資料的にも理論的にも
より多くの人が、同一地平で問題に取り組
むことを可能とするということをも含む。
第二に、社会思想的にアナキズムない
しはアナキズム運動の果たした役割を確定
し、公認させること。日本の近代史の中でも、
幸徳・大杉・石川らに対する評価はマルク
ス主義の公式見解を出ているとは言い難い。
第三に、アナキズム運動を歴史的な諸状
況の中で捉え返し、アナキズム思想の歴史
的な意義を再確認すること。

第二に、社会思想的にアナキズムない
しはアナキズム運動の果たした役割を確定
し、公認させること。日本の近代史の中でも、
幸徳・大杉・石川らに対する評価はマルク
ス主義の公式見解を出ているとは言い難い。
第三に、アナキズム運動を歴史的な諸状
況の中で捉え返し、アナキズム思想の歴史
的な意義を再確認すること。

その他。

私事になってしまったが、小川さんの本に対してはこうした地平を含めて語ることにその意にかたうことではないか、と考えたからである。個々の論文について述べたことも多々あるが、今はまだ断片的でし

かない。兵庫の「イオムの会」ではこの書の読書会から問題別の研究会が設定されたと聞く。私達もそうした研究会を持ちたいものだと思いつつ、その実りある成果に期待して終えたい。

世界語・エスペラントについて

江藤 敏和

エスペラントは、一八八七年ポーランドの眼科医ザメンホフによって発表された国際語（人工国際共通語）として、一般に知られていきます。国際語とは、現在存在している各国の国語や民族語を尊重し、そのうえで、異った言葉を活す国民のあいだ、民族のあいだの相互理解に役立つための言葉という意味です。

しかし、ここで私は、世界語としてのエスペラントの意義を強調しようと思いません。きかないと思うのです。

それは、国際語と言くと、私の主張したい問題について訴える力が弱いと考えるからです。国際語ならば、ある人はぜひ必要だ

なっているのか、そのしくみがどんな弊害をもたらしているのか、そして、私たちはどのような社会を望んでいるのか、という問題と切り離して考えることはできないことは明らかです。

世界の現状をここで詳しく論じることはできませんが、世界語問題を考えるための前提となる問題点を明らかにしておく必要があります。この点について、中村元という哲学者はつぎのように簡潔に述べています。

「……特に現代において注意すべきこととして、いまや機械文明の極度の発展の結果として、物質的方面においては世界は一つになってしまった。飛行機で世界を一周することは何でもないことで遊山旅行のようなものである。ニューヨークにおける株式の騰落は何らかの点で全世界に影響をもたらす。数発の水素爆弾は全世界の人類を絶滅せしめるであろう。ところが精神的方面においては世界は決して一つになっていない。諸国が互いに疑心暗鬼の状態で、イデオロギーを対立せしめ、窮屈なかきを設けている。どうにも動きのとれないこの窮境を打破することこそ思想家の任務ではな

いか」(『比較思想論』より)

ところで、ここで問題は、人々が物質的には世界のあらゆる地域、あらゆる人々と結びつけられていながら、なぜ精神的にはまったくばらばらに民族や国家の枠の中に分断されているのか、ということ。その理由は、簡単に言えば、物質的方面において権力を握っているもの、つまり民族資本家、国際資本家、民族主義者、帝国主義者などが、精神的方面をも支配しているからです。その結果が、現在の民族主義的な帝国主義的な文化状況であるわけです。

だから、「この窮境を打破」しなければならぬのは、決して現在の体制から何らかの利益を得ている「思想家」あるいは職業的知識人ではなく、現在分断されている民衆自身である、と思います。そして私は、物質による精神の支配に対抗して、精神的方面における世界統一を目ざす民衆の思想と運動の一つとして、世界語 에스ペラントと世界語運動を考えているのです。

帝国主義的文化の一つの典型が英語です。現在の日本では、英語教育の制度に疑いをいだくことなく、いちはやく英語を盲目的に習得した人間が、外交官、商社マン、ジ

ャーナリスト、翻訳家、大学教授などとなり、国際的な活動の要所を占め、国際的な情報を独占して、社会的・文化的な権威として存在しています。一方、学校の英語教育の中で長い間劣等感を味ってきた多くの人々は、これらの権威に服従せざるを得ないのが現状です。

また、民族主義的な教育あるいは文化が、いかに私たちのさまざまな能力の発展を抑圧して来たか、あるいは、現に多くの国で抑圧しているかを、ここに示す必要はないでしょう。

私たちは、このような民族主義的な文化、帝国主義的な文化(その典型である英語言語(帝国主義)に対して、世界語 에스ペラントを対置し、その使用を国際的な活動から始めて、人間生活のあらゆる領域に拡げようとしているわけですが、私たちの追求している 에스ペラント運動の性格を簡潔に表わせばつきよりに言えるでしょう。

エスペラント運動とは、物質(資本など)の世界支配に抗して人間性の世界支配をめざす運動であり、民族語や帝国主義的言語(英語)を基礎とする国家の文化攻勢に抗して、人類の未来を自覚した民衆の文化を

創造し、成長させる自主的な共同の努力です。

また、エスペラント運動は、民衆の一人一人が自らの中に世界性を獲得し、民族や国家を越えた感覚能力・思考能力・行動能力を身につけることを目ざす運動です。

ここまで私は、世界語 에스ペラントに関する私の主張を述べてきたのですが、はたしてこれを読む読者が、世界語 에스ペラントの意義を認めてくれたかどうか、自信がありません。それで、もっと具体的に、エ

スペラント語そのものの構造や特徴、エスペラント運動の歴史やザメンホフはじめ運動を進めて来た人々の思想などを紹介する必要があると考えます。そこで、つぎのように3回にわけて、この文を続けていくつもりです。

1、ザメンホフとエスペラント運動——ザメンホフの思想と言語観、エスペラント語の特徴、初期 에스ペラント運動、

2、E・ランティと全世界無民族性協会(SAT)——ランティの思想(無民族主義)、SATの歴史について

3、現在の文化状況とエスペラントの展望。